

---

# とある世界の波乱事件

ka-sa?

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある世界の波乱事件

### 【Nコード】

N6439Y

### 【作者名】

ka-sa?

### 【あらすじ】

ごくごく平和な日常に大きな陰謀が忍び寄る。3人のヒーローと周囲の人物やオリキャラが若干のギャグ要素も含みながら発展するストーリー。

## 第1話、&1t;波乱事件の予兆&gt;;（前書き）

初掲載です。もの足らぬ事もあると思いますが、頑張っていきます。  
ぜひ、アドバイスや、感想をお願いします。

## 第1話、&1t;波乱事件の予兆&gt;

1

とある男子寮の一室、暗い中にテレビの画面だけが光り輝いている。その部屋の窓際に配置されているベッドに布団が丸まって乗っかっている。

ピピピッ、と目覚ましが鳴ると布団がモゾモゾと動き始めた。

函南「ふあああゝゝゝ．．．よく寝た．．．」

布団から出てきて身体を気持ちよさそうに伸ばしたのは、函南 尚輝である。

函南はケータイを開いてギョツとした。

親友の二人との待ち合わせ時間の七分前だったのだ。

急いでパジャマから私服に着替え、朝食を済ませ、猛スピードで部屋を出て行った。

数分後

函南「ハア．．ハア．．ゴメン、ゴメン！」

待ち合わせ場所に走ってきた函南は息を切らしながら謝った。

咲来「全く．．．遅えぞ！」

皆方「まあまあ、函南も謝ってる事だしさあ、許してあげよあよ？」

この三人が集まると馬鹿騒ぎする事が目に見えている。なので、

市導「馬鹿騒ぎしたら風紀委員に通報するから注意してね（ニコッ）」

「

しつかり者の市導が監視役として来ていた。

といいつても一番テンションが高いのは市導だった。なぜなら、今日の目的は遊園地だからだ。

>パラレルスウィーツパーク<、最近はまあまあの人気を誇るテーマパークである。

市導「ねえねえ、早く行かない？」

市導がノリノリなのは言うまでもない。早く行きたくてウズウズしているようだ。

函南「じゃあ、行くか。」

2

学園都市の路地裏の暗闇。遂、先程までは銃声が響いていた路地裏だ。

？『お疲れ様です、一方通行アクセラレータ。後の処理は我々にお任せを』

1人の少年の持つ携帯電話からの声だ。

一方通行「切るぞ、海原」

学園都市の、超能力者（レベル5）の、頂点である1人の少年、一方通行は乱暴に携帯電話を切った。彼は暗部組織である>グループ<の構成員だ。目的は、各構成員で異なったりするのだが。

一方通行「さアて、さっさと帰るか」

彼は現代風のデザインの杖を拾い、歩き始めた。そんな一方通行の耳にスニーカーの足音が届いた。

？「久し振りだにやゝ、一方通行」

逆立てた金髪にアロハシャツ、金のネックレスにサングラス。誰がどう見てもガラの悪い不良だ。

一方通行「土御門オ・・・何の用だア？」

土御門<sup>つちみかど</sup> 元春<sup>もとはる</sup>のサングラスが僅かな光を反射する。

土御門「>グループ<外の話だが・・・お前の知る、木原一族についてぜよ」

木原一族には現在、行方不明の木原<sup>きはら</sup> 数多<sup>あまた</sup>や、テレスティーナ<sup>てれすてぃな</sup> 木原<sup>きはら</sup> ライフライン、木原<sup>きはら</sup> 幻生<sup>げんせい</sup>、木原<sup>きはら</sup> 那由他<sup>なゆた</sup> などが知られている。ある程度の情報は、先程の通話相手の海原<sup>うなはら</sup> 光貴<sup>みつぎ</sup>から聞いている。

土御門「最近、学園都市内で木原一族の1人、木原<sup>きはら</sup> 封記<sup>ふうき</sup>って奴の動向が怪しいんだにや。ソイツは決して科学サイドって訳じゃないんだぜい。魔術サイドだにや。だが家系が研究者なだけに科学につ

いては、豊富な知識を有しているんだにや。その点に関しては海原に勝っているんだにや。原典を持っていて魔術を使う、ただ1人木原一族だぜい。」

多重スパイとして活躍する土御門は、多くの情報源から必要量だけを選んで情報を得ているらしい。

一方通行「ヘエ・・・なかなか面白エ話じゃアねエか。だが、今の俺と何の関係がある？」

土御門「ソイツは>神の右席くに介入、その後は学園都市にも出入りしているぜよ。そして、とある作戦の為に最終信号<sup>ラストオーダー</sup>を利用しようとしているって訳だにや」

一方通行は舌を出し、唇を舐める。

一方通行「良い度胸じゃアねえか・・・あのガキには俺がいるって事を分かせてやるよ」

3

とある男子寮。風呂場から出てきたのは上条<sup>かみじょう</sup> 当麻<sup>とつま</sup>である。

上条「いやゝ、我ながら良く寝ましたつと。って・・・ギクウウ！」

床に1人の純白のシスターが横たわっていた。上条からすると、あからさまに不幸のにおいがする。

上条「あの・・・インデックスさん？何故、そこに倒れているのでせうか？」

純白のシスターが、ギギギツという効果音と共にゆっくり顔をあげた。

インデックス「ねえ、とうま？今、何時だと思っているんだよ？」

上条「え〜つとあ〜〜・・・午後の・・・二時・・・です・・・」

その瞬間、インデックスが恐るべき跳躍力を見せた。ほとんど床にピッタリとついていた状態から、そのまま上条の頭に噛み付ける程の跳躍力を。

上条「ギヤアアアアアアアア！不幸だあ〜〜！！！！！！」

上条は起きて早々にこんなに痛い目に遭わなくてはならないか疑問に思った。だが、

インデックス「とうま〜！ご飯を早く出してほしいかも！」

この大食いシスターから逃げる事は出来ない。

上条「はいはい、分かりましたよ。インデックスさん」

渋々、キッチンへ向かった上条だったが、1つの違和感を感じた。

上条「無い！れっ冷蔵庫の中身が・・・キレイサッパリと消え去っている！俺が食べる筈だった黒蜜プリンを含めて・・・インデックス！冷蔵庫の中身、食ったろ！？」

インデックス「ん〜〜〜・・・テヘッ（ニコッ）」



上条「はああ~~~~・・・不幸だ・・・」

ピンポーン

上条がすっかり肩を落としていると、インターホンが鳴った。

上条「あつ、はいはい。今、出るからな！」

良かったあゝ助かったあゝ、と嬉し泣きしながらドアへ向かっている上条。

とある事件に巻き込まれる事を知らずに。

## 第2話、&1t;波乱事件の足音&gt;

1

とある男子寮の一室で上条<sup>かみじょう</sup> 当麻<sup>とうま</sup>はインターホンが鳴った為、玄関の扉を開けた。すると、

上条「あれ？イタズラか？・・・でも男子寮だからな・・・もしかして土御門か！？」

そう思い、上条は隣の部屋のインターホンを押したが、応答がない。どうやら居ないらしい。

自分の部屋へ戻る為、上条が振り向くと扉に一つの茶封筒が立て掛けてあった。

インデックス「と〜ま〜！お腹へったあ〜〜！」

叫びながら部屋から出てきたインデックスを横目に上条は茶封筒を開けた。

中には明らかに古そうな便せんが数枚、入っていた。

拝啓、初めまして。私の名前は木原<sup>きはら</sup> 封記<sup>ふうき</sup>といます。

上条さんの御話を元同僚の右方のフィアンマから聞きました。是非、御手合わせ願いたいものですが、

今回は別件です。私たち>神の右席<はローマ正教から独立致しました。そして、

新生>神の右席<は第一歩として貴方達、上条勢力を排除しローマ正教、イギリス清教、ロシア成教の

十字教旧教三大宗派への牽制、及び忠告とさせて頂く方針となりました。

名のある人から言えば、インデックス禁書目録やかんざき神裂、かおり火織さん、科学サイドでいえば、みさか御坂、みこと美琴さん等、魔術サイド、科学サイド関係なく排除させていただきます。  
では、後ほど。

2

レールガン常盤台中学の超電磁砲こと、御坂 美琴は公園の中にある自動販売機に蹴りを入れていた。

美琴「ヤシの実サイダー、ゲット〜？」

上機嫌でベンチし座り、ヤシの実サイダーを飲む美琴。そこに後ろから声を掛けられた。

？「み〜さ〜か〜さん！」

かざりベンチの後ろから顔を出したのはさてん佐天、るいこ淚子だ。その隣にはついはる初春飾利がいる。

美琴「佐天さんと初春さん！ビックリさせないでよ〜」

佐天「ビックリさせるつもりはありませんでしたよ」

ニコニコしながら言う佐天を見れば、嘘だという事はバレバレだ。

美琴「あれ？初春さん、黒子は？ジャッジメント風紀委員じゃなかったの？」

初春「ああ、それなら・・・」

その瞬間、シュンという音が聞こえた。続いて美琴によって聞き慣れた声も聞こえた。

？「うゝゝはゝる！また仕事から抜け出したんですの！？」

美琴の女子寮でのルームメイト、しづこ白井 黒子だ。大能力者（レベル4）の空間移動テレポートの能力を持ち、ジャッジメント風紀委員で重宝されているらしい。

黒子「行くですよ！初春！」

初春「うわあゝん、新作パフェ食べたかったのに」

黒子は初春の襟を掴むと空間移動テレポートで消えてしまった。

佐天「なんか・・・ジャッジメント風紀委員も大変ですね・・・」

美琴「そ、そうね・・・」

3

次の日になり、上条はある高校へ向かった。まあ、登校中にも様々な不幸な目に遭ったのだが。

上条「やつ・・・やつと着・・・いた・・・」

全身全霊フルパワーを使い果たし、席に着くなり机に塞ぎ込んでしまった。

？「上やゝん、相変わらずの不幸オーラやん。」

この似非関西人は、青髪ピアス（本名不明）だ。

上条「しよーがないでせう、三輪車に引かれたり、ゴミ収集車に激突されたり・・・」

その時、チャイムが鳴った。まるで計った様なタイミングで月詠<sup>つぐよみ</sup>小萌<sup>こもえ</sup>が教室に入ってきた。

学園都市の七不思議に登録される程の身長で、135cmしかない。

小萌「はーい、ホームルーム始めるですよ」

甲高い声が教室に響いた。上条は窓の外を眺めながら思う。

上条「（あの封筒・・・一体何なんだ？）」

ポーツと眺めていると、席替えて隣になってしまった吹寄<sup>ふきよせ</sup> 制理<sup>せいり</sup>が小さい声で話掛けてきた。

吹寄「（上条当麻！ホームルームに集中しなさい！）」

上条「（木原って日本人だよな・・・？ソイツが何で>神の右席くなんかに？）」

吹寄「（きつ、聞いているのか?!上条当麻!）」

上条「（待てよ・・・>神の右席くって事は、あと三人居るのか!?)」

その瞬間、ビキッと嫌な音がして吹寄のこめかみに青筋が浮かぶ。

それとほぼ同時に吹寄が立ち上がった。

吹寄「小萌先生！上条当麻がホームルームに集中していないので裁きを加えますっ！」

上条「えっ？」

小萌「だっ駄目ですよっ！吹寄ちゃ……」

次の瞬間、上条の目の前に広い額が。次に鈍い音が聞こえて、上条は気を失った。

4

数分経ったのだろうか、上条は保健室のベッドの上で目を覚ました。

上条「俺は……？吹寄にやられたんだった……で、アンタ達は誰？」

隣に座っていた二人組の少年少女にごくごく自然に聞いた。

函南「ああ、俺は函南かななみ 尚輝なおき。」

市導「私は市導いちどう 嵩奈しゅうな。先生に強引に押し付けられて面倒見る羽目になっちゃったんだ。」

ベッドに横たわったまま上条は純粹に思った事を口に出す。

上条「二人は……恋人なのか？」

その瞬間、市導は顔を真っ赤にして否定する。

市導「ちつち違つよっ？……まあ、確かに尚輝の事は好き・  
・だけどさあ」

市導は赤面状態のまま、函南の方を見たが、函南は腕を組んで眠っていた。

すると鐘の様な、ゴォーンという音と共に函南が飛び起きた。

函南「痛つつつてええ！！何すんだよ！市導さん！」

さっきの鐘の様な音は市導が殴った音だ。その市導は、「せっかく言えたのに……」とブツブツ呟いているが、上条には聞こえなかった。

### 第3話、&1t;波乱事件の産声&gt;

1

保健室かみじょうから上条いっとう 当麻しづなは出てきた。隣には先程まで世話してくれた、  
函南かんなん 尚輝なおきと市導いちどう 嵩奈しゅんながいる。どうやら上条と隣のクラスらしい。

上条「ホント、世話になったな。ありがとう」

市導「いゝよ、先生に頼まれたただだし」

そうして渡り廊下で別れたのだが、何故か函南が市導に頭を下げて、  
こちらに走って来た。

上条「どっ、どうした？」

函南は若干、息を切らしていた。だが、彼の口は思ったより滑らかに動いた。

函南「右方のフィアンマを打ち砕いた右手をもう少し見たくてな」

上条「ッ！」

上条は息を呑んだ。まさかこの高校で自分と土御門以外にその名を知っている者がいるとは思っていなかったのだ。そんな上条を見て、函南は薄笑いを浮かべる。

函南「>幻想殺しく・・・いかなる異能の問答無用で打ち消す力・・・だろ？」



上条「何で・・・？」

函南「俺の所属は＞必要悪の教会く。アンタの知ってる、つちみかど土御門元春もとはると同じように、スパイとして学園都市に来てる。ダブルスパイをこなす程、器用ではないけどな」

頬に着いている大きな絆創膏を掻きながら函南は言った。良く見ると、金の首飾りを着けていて形状は十字架だ。

函南「上条、いますぐこの学園都市から出ていけ。なんなら力づくでもいいけどな」

上条はガリッ、という音を聞いた。だが、自分自身が齒軋りした音だと気づいていないようだ。

上条「テメエ・・・何様のつもりだ・・・？テメエが＞必要悪の教会くなら分かってんだろ？この学園都市にはインデックスもいるし、友達もいる。なのに、何で出ていかねえといけねえんだ！」

函南「Oracle013・・・まあ、色々あつて意味まで説明したか無いんで、省かせてもらうぞ」

その瞬間、函南の懐からルーンの刻まれたカードがばら撒かれた。そして函南は呟く。

函南「世界を構成する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ。それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。その名を炎、その役は剣。具現せよ、我が身を喰いて力と為せ」

上条は知っている。この魔術はステイルⅡマグヌスが使う魔術・・・上条「魔術って・・・能力開発のカリキュラムを受けたから使えない筈じゃ・・・」

函南「俺は無能力者の現状維持だ。チェンジレス傷付いていない状態を維持すれば何ともない。それ以外に能力は発揮出来ないけどな」

またも函南は薄く笑い、叫ぶ。

函南「いでよ！魔女狩りの王！」

2

暗い路地裏で十人程の不良が倒れている。その中心に立っている一人の>漢く。

？「まったく！最近のこういう輩は根性が足らねえ！いや、我慢か？！我慢なのか？！」

学ランに鉢巻、旭日旗Tシャツ着用した>漢くが騒いでいるのを尻目アクセラレータに一方通行は、その路地裏を通り過ぎていく。目的の場所は、大型ショッピングモールの一室。情報が正しければ、そこには木原きはら封記ふうぎがいる。打ち止め（ラストオーダー）を守る為に倒さなければならぬ相手だ。

？「で、なんでミサカも駆り出されてんの？」

一方通行の隣には番外個体ミサカワーストがいる。

一方通行「一応、ネットワークから多少、疎いデメエがいた場合、逆探知される事があるうが関係無くなんだろ。あのガキを利用しよオとしてる奴だァ・・・何を仕組ンでるか、分かんねエからなァ」

その時、前からカツン、という革靴の音が反響してきた。一方通行は前方を見るが、暗闇で何も見えない。

一方通行「おい、電磁波で前を見てみる」

番外個体「何でミサカが・・・」

一方通行「良いから早くしやがれ！」

渋々応じた番外個体だったが、次の瞬間、表情から余裕が消えた。

？「こりゃあ、御初に一方通行と番外個体」

暗闇から出てきたのは一人の男だった。2mはあるであろう長身、どちらかと言えば足長体型。身体は痩せている。髪は黒く、短い。瞳の色は、不自然な赤色。服装は紺のジーパンに白いYシャツというラフな格好だが、ジーパンには派手なダメージ加工、Yシャツの袖は解れている。年齢は20歳前後だろう。

？「俺は、木原 封記っつーんだが、ある意味では仮の名前だな。今は、木原 鍼騎<sup>きんき</sup>つてのが正しーんだが、お前にとってはどーでもいいーんだろ？一方通行？」

一方通行「あア、そのとオリ！よく分かってンじゃねエか！」

一方通行は首筋の電極手を掛ける。そして驚異的な速さで鍼騎に詰

め寄る。一方通行の拳が鍼騎に叩き付けられる・・・筈だったのだが、>ベクトルを変換する能力<を無視されて、鍼騎に拳を掴まれる。

鍼騎「黙れ、小童が」

その瞬間、またも>ベクトルを変換する能力<を無視され、鍼騎の脚によって吹き飛ばされた。

一方通行「グア・・・ガア・・・クソツたれがア！」

吹き飛ばされながらも、一方通行は空中でベクトルを変換し、またも鍼騎の方へ向かっていく。

鍼騎「つたく、だからさー」

呆れた様子で鍼騎は口を開きながら右掌も開いた。その掌には一つの魔法陣が。

鍼騎「黙れてんだ、クソ小童！」

魔法陣が黒く光り始め、辺りを包み込んだ。すると、一方通行が勢いそのままに地面に落ち、五回程バウンドした。一方通行は血反吐を吐きながら、

一方通行「クッソオたれがア・・・何なんだ、その紋章みてエなのはア?!」

鍼騎は恐ろしい威圧感と共に満面の笑みを浮かべて言った。

鍼騎「>幻想殺しくっつーのは知ってんか？」

#### 第4話、&1t;波乱事件の暗闇&gt;

1

常盤台女子寮から出てきたのは、御坂<sup>みさか</sup> 美琴<sup>みこと</sup>だ。彼女は放課後にとある人物と待ち合わせしているのだ。常盤台中学に入る決め手となった人物で、強能力者なのだが美琴が尊敬して止まない人物。

？「ごめんね、お待たせ！」

それは市導<sup>いちどう</sup> 嵩奈<sup>しょうな</sup>だ。彼女は名門常盤台を卒業したクセに何故か無名のとある高校へ進学してしまったのだ。

美琴「いえ、そんなに待ちませんでしたよ。それにしても・・・なんか雰囲気、変わりました？」

市導「えへへ・・・分かる？実はね、好きな人がいるんだ」

美琴はビクリして飛び上がりそうになる。美琴は知っているのだ。市導が通う高校には、上条<sup>かみじょう</sup> 当麻<sup>とうま</sup>がいる。まさか・・・

美琴「そっそその人ってどどっどんな人ですか？」

市導「頭は良なくて、よく補習に呼ばれて・・・」

美琴「（ちっちゃい違いだね！？まさか先輩がアイツの事なんか・・・）」

美琴が赤面しながら首をブンブン振っているのだが、市導は気付いていない。

市導「他の人に優しいんだけど、鈍感で・・・」

美琴「（アイツと・・・いつ一致してる！？）」

市導「で、しばらく学校に来ないなあ、って思ってたら傷だらけで帰って来て・・・」

美琴「あああああああどおしよお・・・」

美琴は精神的に現実逃避を始めそうになった。あの感情に気付いてから女子がこのような話を始めると毎度の様に混乱してしまう。

市導「この前も頬に傷を作って帰って来てね、何があったか聞いても教えてくれないんだ。幼馴染だから分かるんだけど、問題に人を巻き込みたくないみたいなんだけど・・・こっちの気持ちも考えて欲しいよね」

この話を聞いた瞬間、パニックに陥っていた美琴の動きが止まった。

美琴「・・・・・・・・頬に傷があるんですか？」

市導「うん、一か月位前にね」

美琴「そっそうなんですか！」

すると市導はまじまじと美琴の顔を見つめた。美琴は驚いて顔を真っ赤にして一歩退いた。

市導「はぁ〜ん、成る程ねえ〜・・・美琴ちゃん、好きな人がいる

でしょ？」

一気に美琴の赤面がエスカレートした。美琴自身も体温が上がっているのに気付いた。

美琴「えっえ、えつと・・・いつ居ないですよっ！」

そんな美琴の反応を見て、市導は、後々ゆっくりと聞き出そうと思った。

2

とある高校の敷地内で轟々と燃え盛るのは、魔女狩りの王。こんな事態でも周りが騒がないとなれば、人払いくでも使っているのだろう。

函南「もう一度、言うぞ！上条、今すぐこの学園都市から出ていけ！」

牽制のつもりだろうか、魔女狩りの王が十字架を上条の前に叩き付ける。コンクリートが溶け、まるで噴火の様に炎が噴き出す。

上条「だから何で俺が学園都市から出ていかなくちやなんねえんだよ！理由が納得できるものなんなら、潔く出ていく！理由を言え！」

その言葉を聞いた函南かなみ 尚輝なつきの眉がピクリと動く。

函南「・・・それを言ったら・・・上条、お前が学園都市に残る事になる！お前が一番、厄介視されてんだ！だからお前の周りの人々が巻き込まれる！だから・・・出ていってくれえ！！」



その瞬間、>魔女狩りの王<が消し飛んだ。そして炎の残骸が集ま  
っていく。その炎の集合体がドラゴンの形を成すまでに時間は掛か  
らなかった。この魔術、上条は知らないだろうが黄金鍊成（アルス  
Ⅱマグナ）と同様、実現不可能とうたわれた魔術で、>聖ジョージ  
のドラゴン<を元に行っている魔術。

函南「>民殺しの龍王<・・・伝説上の魔術だ。こいつは>魔女狩  
りの王<とは桁違いの火力を誇る。しかも有り難い事にルーンが国  
内に存在していれば消滅しない。こいつを消すには俺に命令させる  
か、国内にあるルーンを全て潰すか・・・最後の一手として俺の意  
識を奪えば消滅する」

音と火の粉を飛ばしながら>民殺しの龍王<は上条に向かって飛ん  
でくる。だが、上条は薄笑いを浮かべていた。そこで函南は違和感  
を覚え、気付いた。上条は>幻想殺し<を覚醒させていないが、現  
時点の能力を上手く扱っている事に。

上条「だったら、テメエを殴ってテメエの目を覚まさせてやる！」

こっちに向かってくる>民殺しの龍王<の首を掴んで勢いそのまま  
に後ろへ放り投げる。

上条「所詮は>異能の力くだ！」

次の瞬間、上条は脚のバネを最大限し活用して函南との距離を一気  
に詰め寄る。

函南「なっ、何!？」

上条「うおおおおおー！！！！」

>幻想殺しくを宿した上条の右手が函南の顔面に向かって伸びている。だが、殴った音が聞こえる事は無かった。

3

暗い路地裏に倒れているのは一方通行だ。隣には番外個体が気絶している。それを前に木原 鍼騎は高笑いしている。

鍼騎「アツハハハハハハハハ！！！！こりゃー傑作だ！！学園都市一位の一方通行と第三次製造計画の番外個体・・・そんな怪物が地に伏せるなんてなあー！！！！」

一方通行の脳裏で木原 数多の笑い方と重なった。一方通行は齒軋りをする。その剣幕には怒りのみが宿っているのでは無い。打ち止め（ラストオーダー）を守る、その目標を達成する為の動力源を満ちている。その力が宿っている。

一方通行「うおおおおおおおー！！！！」

一方通行の背中には白い翼が出現した。そのまま鍼騎に向かって再び飛び立つ。鍼騎の掌からまたも黒い光が漏れ出した。だが、その事で一方通行の能力が無効化される事は無かった。

一方通行「さアて、よくやってくれたなア！！だが・・・」

拳が鍼騎の額に向かう。そして、一方通行の表情は極悪なモノへと変わる。

「一方通行」「ここからはア・・・一方通行だア!!!!!!!!!!!!!!」

第5話、&1t;波乱事件の魔の手&gt;;（前書き）

すみません。学校やら家の用事やらで投稿するのが遅くなってしまいました・・・

お詫びと言ってはなんですが、少しでも長めに作りました。もしかしたら、これ以降も投稿が遅れるかもしれませんが、よろしくお願いします。

## 第5話、&1t;波乱事件の魔の手&gt;

1  
ゴオンという鈍い音と共に、木原きはら 鍼騎はりきの身体が吹き飛ぶ。だが、空中で体勢を切り替えた鍼騎は一方通行を睨む。だが、その眼は赤かった筈なのに碧眼になっている。

？「まったく、鍼騎はまたこんな魔術に頼ってやられたのか・・・相変わらず学ばない野郎だ」

この声は鍼騎の口から出ているが、声色は全く違う。先程までの荒々しい声から、冷徹そうな声になっているのだ。

？「おっと、自己紹介すると僕の名前は木原きはら 零軌れいき。一応、二人目の木原きはら 封記ふうきだよ」

その時、一方通行は零軌の左手の甲に魔法陣が描かれているのに気付いた。先程の鍼騎には無かった魔法陣だ。勿論、紋様も違う。

一方通行「テメエ・・・多重人格か？」

零軌キル「うん。人工的な多重人格だよ。ちなみにこの方法で多重能力デュアルス者になる研究も為されているみたいだけどね」

すると、零軌の左手の魔法陣が白く光り始めた。すると零軌の背中  
に一方通行と同じ翼が出現した。

零軌「>能力追跡くつていう現存する能力を魔術で再現したんだ。  
確か・・・滝壺たきつぼ 理后りこう」とか言う大能力者だったかな？その娘の有

する能力だ。僕の場合は超能力者レベルだけど」

その瞬間、一方通行が崩れ去った。零軌にA I 拡散力場を干渉されたのだ。

一方通行「テツ・・・テムエ・・・！！！」

立ち上がるうとした一方通行だが、何故かチャーカーも上手く稼働していない。唯一の救いが、会話を可能としている事だが、一方通行にとっては必要のない物だ。だが、一方通行はまだ戦える。

一方通行「オオオオオオオオオオオオ！！！！！」

拳を地面に叩き付ける一方通行。コンクリートが捲れ上がり、零軌を巻き込もうとする。しかし、零軌は軽く足踏みをする空高く飛んだ。>ベクトル操作くを利用したのだ。だが、パアンという乾いた音と共に空中で零軌の体勢が崩れる。どうやら>反射くが機能しなかった様だ。

？「大丈夫か？！一方通行！」

物陰から聞き覚えのある声が聞こえた。ロシアや、学園都市でも聞いた声。ただの>武装集団くスキルアウトの少年。『誰にも選ばれず、資質らしいものを何一つ持っていないくても、たった一つの大切な者のためにヒーローになれる者』、その名は浜面はまつい 仕上しあげという。

浜面「物陰に隠れる！！」

一方通行は地面の倒れている番外個体を抱え込み、ゴミ置き場の物陰へ潜り込んだ。何度も乾いた音が鳴り続ける。何故かは分からない

いが、零軌は自ら生み出したベクトル以外は>反射<出来ないらしい。

浜面「うおおおおおおお！！！！」

サブマシンガンが連続して火を噴く。全弾命中とはいかなかったが、数発は命中した。零軌の肩や腿からは血が滴り落ちる。浜面は肩から下げていたカバンからロケットランチャーを取り出した。警備員アンチスキルの倉庫から奪った試験品だ。浜面は充填に手間取りながらも構え、撃ち放った。轟音と共に砂煙が舞った。その中から聞き慣れない声が聞こえた。

？「まあ、科学の兵器は危ないな。魔術の領分から反撃させてもらうよ」

2

学舎の園の近くにある喫茶店の窓ガラス付近のテーブルにはニヤニヤしている市導いちどう 嵩奈しゅうなと大絶賛赤面中の御坂みさか 美琴みことが座っていた。

市導「成る程ねえ〜・・・確かに上条君に惚れる気持ちも分かるなあ〜。命を賭けて自分と自分のクローンである妹達シスターズを救ってくれた訳だしねえ・・・そりゃ惚れるわあ〜」

面白い事に市導のニヤニヤ度と美琴の赤面度は比例している。なので、もう少しで美琴の頭から湯気が出そうな勢いだ。

市導「まあ、保健室で会った事もあるから何となく分かるよ。それでさ・・・」

チラリと窓ガラスの外を見て苦笑する。

市導「で、あの子達は美琴ちゃんの友達？」

窓ガラスに張り付いて「にやは」とか言っているのは、佐天 涙子。その後ろで必死に頭を下けているのは、初春 飾利。何やらドス黒いオーラを放っているのは白井 黒子だ。黒子は空間移動で店内に入ると、市導を睨みつけた。

黒子「すみませんが、お姉さまと密会するのは殿方で無くとも、この私を通してからにして頂けません？」

睨みつけられた市導は気にしない様子で、

市導「制服からして常盤台、美琴ちゃんを>お姉さまと呼んでいる事から一年生、空間移動能力者という事の全てを考慮すると・・・第一七七支部の風紀委員の白井 黒子ちゃんね。初めまして」

一気にそこまで解析された黒子はギョツとして美琴に耳打ちをする。

黒子「（お姉さま、この女は一体、何者ですの？只者ではありませんせんわ。何せ、この私を・・・）」

美琴「（私の先輩よ！今の高校一年生。昔、お世話になった先輩で、私の憧れの先輩なの！）」

更に黒子はギョツとして、とつさに市導に頭を下げて詫びる。

黒子「すすみませんですの！」



その時、入って来た佐天と初春はニヤニヤして携帯電話を取り出した。

「佐天「（なっなんか・・・白井さんが頭下げてるトコ、面白い!!）」

初春「ジャッジメント（風紀委員の仕事中に弱みとして使えますよ、コレ!!）」

二人は携帯電話のカメラ機能を起動させた。

カシャツ・・・

3

幻想殺しを宿した、上条かみじょう 当麻とつまの右手は、函南かななみ 尚輝なおきの顔面を捉える事は出来なかった。何故なら・・・

函南「厩気楼だよ。ステイルⅡマグヌスもやっていただろ？」

その瞬間、上条の背中に鈍い痛みが走った。函南の左の膝が叩きつけられたのだ。思わず上条は咳き込む。身体の向きを変え、再び函南に向かって走り出す上条だったが、

？「もうやめときな、かみやん。かみやんじゃあ、肉弾戦でも函南には勝てないにや」

金髪で、アロハシャツで、サングラスで、陰陽師で、極度のシスコンにして、重度のオタクであり、デルタフォースの一角。つちみかど 土御門元春だ。

土御門「今、一方通行が木原アフセラレータ 封記きほうきと交戦してる。かみちゃんも行き  
たいだろうが、それより・・・新生＞神の右席くについてぜよ」

口調は相変わらずだが、内容に関しては大真面目な内容だ。

土御門「新生＞神の右席く<sub>に</sub>在籍しているのは、奇妙な事に・・・  
木原、一人だけだにや。だけれども、木原姓の別人を含めると、し  
っかりと四人いるんだにや。つまり、木原 封記ふうきとその他の、  
零軌れいき、皇機こうきと同一人物なんだぜい。四重人格って事ぜよ」

淡々と話を進めていく土御門に対し、上条の頭上には＞？＜が浮い  
ていて、函南はうんうんと頷きながらも素っ頓狂な顔をしている。

上条「ちよっ・・・待てよ、土御門！ たった一人で＞神の火<と＞  
神の力<、＞神の薬<、＞神の如き者<だっけか？・・・その全  
てを持つてるのか！？」

函南「可能ではあるな・・・だけど、かなり天使や神の子に近い身  
体を持つていなければならぬし、聖人でなくちゃならぬし・・・  
何より＞天使の力<以上の力を使いこなさなければならぬ。そん  
な魔術師が今まで表舞台どころか、話題にも出てこないなんて・・・  
ありえるのか？」

その時、妙に甲高い声が聞こえて、上条達は振り向いた。

小萌「上条ちゃんと土御門ちゃんと函南ちゃん！ もうそろそろ完全  
下校時刻ですよー！ さっさと学校敷地内から出やがれ です！」

上条のみ素直に聞き入れたが、残りの二人は啞然としていた。

函南「俺は>人払い<、やつといたぞ?なんで小萌先生は学校敷地内に・・・?」

土御門「世の中には、まだ不思議な事は沢山あるにや」・・・」

## オリジナルキャラ説明（前書き）

小説家になろう、から持ってきました。

## オリジナルキャラ説明

### > 主要キャラクター紹介<

函南 カンナミ ナオキ 尚輝

身長180cm、体重59kg、10月24日生まれ

髪型は黒髪の短髪、寝癖でボサボサ。頬には大きな傷があり、普段は絆創膏で隠れている。

とある高校に通う、高校一年生。上条 当麻と同級生。

頭は悪く、ただでさえ学力の高くない高校に通うものの、成績順位は下から数えた方が断然、早い。

土御門 元春と同じく、科学サイドと魔術サイドの両方と通じている。

魔法名は チェンジレス racleo13、で所属は必要悪の教会。レベルは無能力者の現状維持。

咲来 サクライ タケル 猛劉

身長176cm、体重63kg、8月19日生まれ

髪型は銀髪の短髪、ワックスで立たせている。語尾には「ぞ」が着く。

とある高校に通う、高校一年生。函南 尚輝とは親友。

ジャッジメント 風紀委員の白井 黒子とは親戚に当たるが、互いに顔見知り程度。

函南 尚輝とは対照的に頭が良く、クラスの学級委員を務めている。

魔術サイドとは全くの無縁。メタモルフォーゼ 両親は科学者として働いている。

レベルは強能力者の肉体変化で学園都市側から重宝されている。

皆方 ミナカタ コウノスケ 鋼之輔

身長179cm、体重65kg、1月31日生まれ

髪型は黒髪の短髪、髪の質が良い。のんびりした性格。

とある高校に通う、高校一年生。函南 尚輝とは親友。置き去り（チャイルドエラー）で能力開発を受けた。

頭は平均的で特に目立つポイントも無い。何故か周囲からの信頼度が高い。

魔術の存在自体は知ってはいるが、どの様なものかは知らない。  
レベルは大能力者の密度変化で、常に炭素の粉を所持している。  
デスチェンジ

イチドウ  
市導 嵩奈 シュウナ

身長164cm、体重46kg、3月3日生まれ

髪型は茶髪のロングヘア、喜怒哀楽がはつきりしている。

とある高校に通う、高校一年生。函南 尚輝とは幼馴染。

絶叫系のアトラクションが大好きで、毎週、遊園地へ行っている。

頭は良く、学校の中でも常にトップ10に入っている。

魔術とは全くの無縁。

バイロキネシス

レベルは強能力者の発火能力だが、能力を使いたがらない。

その他、原作キャラ

第六話、&1t;波乱事件の波長&gt; ; (前書き)

すみません、再び投稿が遅れました。しかも少し短いかもしれません(苦笑)

これから遅れるかもしれません。どうかよろしくお願いします。

## 第六話、&lt;t;波乱事件の波長&gt;t;

1

かなり不幸な少年、上条かみじょう 当麻とつまは帰宅すると肩を落とした。冷蔵庫の中身がキレイサッパリに消えているのだ。つい先日、居候少女インデックスが中身を空にしたばかりだと言っのに・・・

上条「いつ、インデックスさぁくん!!（泣）またもや冷蔵庫の中身を消し去ったのは貴女でせう!？」

インデックス「だって、とうまが・・・」

上条「はああああああああ・・・不幸だ・・・」

プルルル・・・プルルル・・・

上条の携帯電話が鳴る。何となく八つ当たり気分電話を取った。

小萌「上条ちゃん、シスターちゃんを焼き肉食べ放題に招待したいんですけど・・・大丈夫ですか？」

上条「あ、お願いしても良いんですか？」

小萌「どおんと来いなのですう」

数分後

インデックス「行って来ます?」



ガチャ・・・

ボタン・・・

インデックスが部屋を出た瞬間、上条は肩の荷が一気に下りた様に感じた。大きく背伸びをして寝転がると、

上条「これでしばらく安泰だあ」

プルルル・・・プルルル・・・

次は携帯電話でなく、家の電話が鳴った。

上条「はい、上条です」

黄泉川「ちよつと出席日数の事とかでこれから補習になったからよろしくじゃん」

ブツツ・・・

上条「はあ・・・不幸だ・・・」

2

路地裏に何度も銃声が響き渡る。浜面<sup>はまづら</sup> 仕上<sup>しあげ</sup>は弾が切れた機関銃に銃弾をリロードする。物陰に隠れている筈の一方通行<sup>アクセラレータ</sup>に動きは無い。先程から、木原の声色が変わっている。それからというもの、銃弾が全く効いていないのだ。

？「あああ、弾の無駄だって。オレには効かないからさあ、やめ  
とこうな。」

灰色の瞳に、低く響く声。彼の名は、木原<sup>きはら</sup> 皇機<sup>こうき</sup>。4人目の木原<sup>きはら</sup>  
封記<sup>ふうき</sup>だ。皇機は額に魔法陣が浮かび上がる。だが、その時、

pipipipi

携帯電話の電子音が路地裏に鳴り響いた。すると、皇機はポケット  
から携帯電話を取り出し、何やら数回言葉を交わすと、

皇機「すまねえな、用事が入ったから退却させて頂くわ」

次の瞬間、皇機の手元から煙が立ち昇った。浜面は機関銃を構えて  
煙に乱射するが、うんともすんとも言わない。煙が晴れた時には、  
そこに皇機の姿は無かった。

浜面「危ねえ・・・あっちが逃げてくれて有り難かったな・・・」

ほつと肩を下ろした浜面は先程、一方通行が隠れた物陰に向かう。  
そこには既に一方通行の姿は無く、置き書きがあった。それを握り  
しめ、浜面は走って路地裏から出て行った。

3

イギリス清教に所属する魔術師の一人、函南<sup>かななみ</sup> 尚輝<sup>なおき</sup>は、あくまで一  
人の学生として、そして一人の青年として、重大なミスを犯してい  
た。

函南「うううううううう・・・」

上条「はあ……不幸だ……」

この2人は机にとつ伏している。その二人をニヤニヤしながら笑っているのは3人。教室の中にいるのは彼らを含め、6人しかいない。1人はピンク色の髪にピンク色をした幼児に見える……教師、月詠よみ小萌こもえだ。ちなみにニヤニヤしているのは右から、皆方みなかた鋼之輔こうのすけ、土御門つちみかど元春もとはる、青髪ピアス（本名不明）の3人だ。

青髪ピアス「かみゃん、相変わらず不幸オーラ拔群やないか」

土御門「上条も函南も……氣力無いにや」

皆方「それにしてもお、苦手分野が抜き打ちテストに出るとはあ……  
・っていうか、俺がここにいないのは間違いじゃないの……？」

唯一、常識がある皆方は落ち込んでいるが、それ以外の面子はどう見ても慣れている。とでもリラックスして補習を受けている。

小萌「上条ちゃんも函南ちゃんも、机に寝てないで起き上がれです」

精一杯背伸びして黒板にチョークで文字を書きながら注意する小萌。相変わらず青髪は「ロリはええな」ロリ万歳や「ロリ以外も好きやけどな」とか言っているが、土御門以外は相手にしていない。だが、しばらくすると、上条以外が、「ロリ（青髪ピアス）か妹（土御門）かメイド（函南）それとも猫耳（皆方）か」の議論を始めてしまった。小萌は再び注意するが、焼け石に水。ヒートアップした議論は終わりそうに無い。バニー派の上条ですら引いてしまったのだから。

上条「もう、分かんねえよ、お前達の世界観・・・」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6439y/>

---

とある世界の波乱事件

2012年1月14日20時53分発行